

乳幼児の子育てをする母親への臨床心理学的地域援助に関する研究：母親の居場所という視点から

鬼塚, 史織

<https://hdl.handle.net/2324/2198524>

出版情報：九州大学, 2018, 博士（心理学）, 論文博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（2）

氏 名 : 鬼塚 史織

論 文 名 : 乳幼児の子育てをする母親への臨床心理学的地域援助に関する研究
—母親の居場所という視点から—

区 分 : 乙

論 文 内 容 の 要 旨

本研究の目的は、乳幼児期の子育て支援における臨床心理学的地域援助の具体的方策を構築することであった。

第1章では、乳幼児期の子育てをする母親への臨床心理学的地域援助の実践に向けて、乳幼児の子育てをする母親の抱える問題と、それに関わるこれまでの子育て支援に関する研究について概観し、現況の子育て支援の限界や臨床心理学分野における今後の子育て支援の課題を挙げ、本論文の構成を示した。第2章～第4章では、子育てグループに参加する母親の居場所について検討し、続く第5,6章では、その知見を踏まえて、地域において支援を実践しその有効性の検討を行なった。

まず第2章では、地域の子育てグループにおける母親の居場所について、育児不安と、母親としての意識との関連やその具体的特徴について量的側面(第1節)と質的側面(第2節)から探索的に検討した。

第2章第1節においては、子育てグループにおける母親の居場所について、居場所の特徴と居場所感という2つの視点で検討した。その結果、居場所の特徴については、①自分を受け容れてくれたり、考えを共感できるような友だちや仲間がいると感じられること、②周囲の人から自分に対して期待や関心を向けられると感じられること、③自分の振る舞い方を過度に気にせず、安心してありのままに振る舞えることという3点の特徴を認知していることが示唆された。また、子育てグループに居場所感を抱くことと育児不安、消極的・否定的な母親役割の受容との関連が示唆され、子育てグループにおいて居場所があることの有効性が窺えた。

第2節では、第1節では捉えられなかった「母親の居場所」に特有の特徴を捉えるため、質的検討を行なった。母親の居場所は、第1節で得られた3点の特徴を中核とし、さらに、子どもとともに居ることができる場所であること、子育てについて学ぶことができる場所であること、その場所が子育てをする生活においてかけがえのない場所であることという母親の居場所に特徴的な概念も見出された。しかし、これらの検討は時間軸を特定しない断片的な検討であった。

第3章では、第2章を踏まえ、母親の居場所について過程から捉える研究を実施した。居場所という視点から、子育てグループに参加することによる母親の体験を過程から捉えることによって、育児不安の軽減や母親としての意識の変容との関連について検討を行なった。子育てグループの参加者への面接調査の分析を通して、第2章で得られた居場所の特徴や居場所感を包含したその場を居場所とする過程が得られた。母親の意識や態度の変化とは、自分の子育ての課題の解消から始まり、その場で居場所感を抱きながら母親として子どもと過ごすことにより、個人としての自分と母親としての自分の調和が実現される居場所を得て、他者の子育てを支援する意識や態度が芽生えるという相互支援活動の基盤が母親に育まれる過程であることが示唆された。

第4章では、第3章において示された相互支援活動の基盤となる他者の子育てを支援する意識や態度が芽生える体験に着目した。その体験をより詳細に捉えるため、子育てグループの一参加者から運営に携わる支援者となった母親の参加を深めていく体験を居場所という視点から明らかにし、地域の子育てグループにおいて展開されている母親の相互支援の様相を検討した。その過程において、子育てに悩む一母親が運営に参加するという転換期を迎え、支援をする側へと変化する姿が捉えられた。この背景には、当事者同士という枠組みの中で、子育てをする一母親としての学習と、地域の子育て支援者としての学習という2つの学習過程が考えられた。また母親の居場所は、子どもとともに受容され、本来の自分を取り戻す場所であることに加えて、担った役割を達成し、充実感が得られるというような居場所へと変容することが示唆された。

第2章～第4章までの研究から、母親が子育てグループに居場所感を抱くことにより、子育てのゆとりやその場において他者との関係性の深まりが生まれ、それがグループ全体で一緒に子育てをしているという体験へとつながることが示唆された。また、母親としての意識に関して、子育てグループが居場所となることにより、「自己性」の尊重が体験され、運営の役割を担うことにより、他者を支援する側へと役割が展開する中で、母親の主体性が再生されて「母性」と「自己性」の葛藤状況が止揚され、その調和が実現されたことが推察された。以上のことから、その場が居場所となる過程には、当事者の主体的な活動や相互の関わりが重要となることが窺え、支援者はその過程を理解し、当事者同士の関わりから生じる体験を奪わないように、周辺的に支えることが有用だと考えられた。

第5章では、地域で展開されている子育て支援事業に携わる臨床心理士として、第4章までの調査研究を生かした支援、つまり母親の居場所づくりの支援を試みた。アクション・リサーチの研究手法のもと、実践を試み、それを検討し(第1節)、その実践の課題を踏まえた新たな枠組みで次の実践を展開した(第2節)。

第1節では、新たな支援を展開するという視点から事例を検討し、地域の子育て支援における活動の展開の様相を示した。そこでは、臨床心理士として、まずはその地域コミュニティの一員となって利用者、スタッフとつながることが重要であり、その過程が実践の土台となることが示唆された。その中で実践したグループは、現場の見立てと第3章、第4章の示唆から、母親同士の相互支援を促すグループが有効であると考えられたため、カナダの子育て支援プログラム **Nobody's Perfect** を参照し、参加者が中心となってセッションを展開するという運営方針で実施した。4回の試行を得て、その有効性が窺えた一方、グループの設定については、課題が挙げられた。

第2節において、上記の課題を踏まえ、改めてグループを開催し、その2年間の事例を検討し、地域の子育て支援に有効な示唆を3点得た。①乳幼児を抱える母親は、当事者同士で情報共有ができるようになるとその場で安心感を得られ、さらに深いレベルの話しができるようになる点、②一定数の母親は、地域の子育て支援の場に参加していても、他の母親と交流できないまま過ごしている可能性が高いため、支援者が交流の機会に誘う、つまり、母親の居場所づくりの介入が有効であるという点、③母親同士の相互支援を促すファシリテーターの役割とは、グループの枠組み、内容の検討に尽力し、セッション中は、母親の体験を引き出し、交流を促す点であった。

第6章では、総括として乳幼児の子育てをする母親の臨床心理学的地域援助に関して、居場所、育児不安、母親としての意識という視点から総合的な考察を行ない、臨床心理学的地域援助の具体的方策についてその一方策を示した。最後に、対象者が限定されていた点や、援助可能な水準を十分に認識し、今後は本実践を土台としながら、新たな支援方法を検討すること等を課題として挙げた。